スポーツにみる植民地権力とナショナリズムの相克
第11回オリンピック競技大会(ベルリン)の金メダリスト孫基禎を中心に

金　誠
（札幌大学）

はじめに

2011（平成23）年、大韓体育会ではこれまでのスポーツ選手のなかでも特に優秀な成績を修めた者、あるいは国家のスポーツ事業に多大なる貢献をした者を国家のスポーツ英雄として顕彰する作業が始まり、この年、2名のスポーツ選手がスポーツの英雄として選出されている(1)。そのひとりが1936（昭和11）年にベルリンで開催された第11回オリンピック競技大会（以下、ベルリン五輪と略記する）のマラソンで優勝した孫基禎であった。

このベルリン五輪での孫基禎の優勝は日本と植民地朝鮮の何れにも歓迎されたが、とりわけ朝鮮半島のスポーツ史上においては画期的な出来事であり、当時の植民地社会に大きなインパクトを与えた。それはその後に起こった日章旗抹消事件をも含めて植民地朝鮮におけるスポーツの意義を象徴する出来事として扱われてきている(2)。ただ韓国内における孫基禎を巡る研究は上記のように国家の英雄を讃える事業が推進されていくなか、孫基禎の業績を再検討し、その業績を讃える研究がその主なものとなっており(3)、英雄を客観視し、批判的な考察を加える研究は皆無であったと言わねばならない。日本においても孫基禎はよく知られている存在ではあるが、体系的な研究が十分にはなされてきておらず、日章旗末梢事件に着目して孫基禎をめぐる日本および朝鮮民族のナショナリズムと植民地権力の関係について触れられている記述がみられる程度でしかない(4)。つまり植民地下において孫基禎と朝鮮民族が如何に抑圧されたのかという視角から、そのナショナリズムの発露となった孫基禎のベルリン五輪での優勝、あるいは日章旗末梢事件との関係にのみ着目することになっており、結果、植民地権力に対するナショナリズムの対抗図式でしかこの問題を捉え切れていないのが現状である。

そのため本研究では折り重なり合う植民地権力とナショナリズムをその視角とし、その帰結にこれまで触れられることがなかった孫基禎の対日協力行為を付置し、その行為がどのような推移をもってなされたのかついて考察していく。これは英雄を貶めようとするものではなく、なぜ彼が対日協力行為をせざるを得なかったのか、それをオリンピックという国家の英雄を生み出すシステムと植民地権力−ナショナリズムの摩擦のなかで規定された行為であったとする点が本研究における仮説であり、それについて実証していくことが本研究の目的である。

研究を進めるにあたり、史資料に関しては『読売新聞』、『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』などの新聞資料、さらに大日本体育協会が発行していた『オリムピック』などの雑誌資料を用いて日本側の認識を確認する手掛かりにしていく。それに対して当該期における朝鮮側の認識を民族主義的な言説が確認される『東亜日報』や『朝鮮日報』、『朝鮮中央日報』などの新聞資料を用いて分析し、双方の言説の比較を行い、それぞれの思惑をみていきたい。

ベルリン五輪後の孫基禎に関しては新聞資料に加えて、内務省警保局が発行していた『特高外事月報』などから孫基禎に対する監視・警戒の状況を把握し、加えて日章旗抹消事件については『緑旗』という植民地朝鮮で発行されていた雑誌のパンフレットを手掛かりにして事件に対する日本側

の認識を分析し、これらから朝鮮民族のナショナリズムを絡め取る植民地権力の状況を再確認する。また孫基禎の自叙伝や当該期に彼が綴った文章、また『京城日報』の記事からは孫基禎の言動を確認していくこととする。

1. 孫基禎の優勝と日章旗抹消事件

ベルリン五輪のマラソンでは孫基禎が2時間29分19秒という記録で優勝を果たし、見事金メダルを獲得する。また南昇龍も3位と健闘し、銅メダルを獲得するなどマラソンにおける朝鮮人選手の活躍は際立っていた。しかし、その後に起こったいわゆる日章旗抹消事件は植民地朝鮮の現実を知らしめるものであった。本章では孫基禎のマラソン優勝時の各紙で報道された言説を比較してその特徴を分析し、その後に起こった日章旗抹消事件について考察していく。

(1) 日本と朝鮮にみる報道の特徴と差異

孫基禎がベルリン五輪のマラソンで優勝したのは1936（昭和11）年の8月9日のことだった。8月10日の『読売新聞』の第2面には「“マラソン日本”世界を征服」、「今ぞ成就す廿四年の宿願 孫に輝く“大會最大の覇者” 南も憤走して三等に入賞」という見出しで競技の経過とストックホルム大会以来24年目にして手にした金メダルを称える記事が掲載されている(5)。また10日の号外には競技場に入ってくる孫基禎の写真を掲載し、オリンピック特派員であった西條八十が「我等の英雄！彈丸の如く躍り出た小男」という詩のなかでその時の孫基禎の姿を以下のように語っている。

> 赫い夕陽は場内に流れ染めた午後五時半十萬の眼は、地下道の口に、磁石のやうに吸ひ寄せられた
> その刹那！砲丸のやうに躍り出でた小男！
> 孫！孫！地下道を走り出て、丘上に燃えるマラソン炬火を仰いだ
> 小さい彼の身體から、流れた全場を壓する大きな影！
> 拍手、拍手、歡聲、怒濤のやうな歡聲！
> あゝ、誰れか、今日のこの勝利を期待しただろう
> 踊れ！起て！歌へ！日本人！
> 日本は見せた
> けふ明瞭（ハツキ）りみせた
> この小男孫のなかに
> 世界を指導する、躍進日本の勇ましい現在の姿を(6)

このように孫基禎の優勝を世界のなかの「日本」と重ね合わせながら語る論調となっていることに注意したい。

次に『東京朝日新聞』の報道をみてみよう。8月10日の第2面には「マラソン廿四年の宿願成る」、「世界に誇れ！孫選手　見事一着・日章旗輝く　南選手も堂々三着」という見出しで、競技経過の詳細、孫基禎や2位となったハーパーの談話なども掲載している(7)。さらに第11面には孫基禎や南昇龍の母校である朝鮮の養正高等普通学校の安校長が喜びで涙する様子を掲載するなど両選手の地元の声も報道していた(8)。翌日の8月11日の第3面には「半島選手の勝利」という記事が掲載されている。この記事は朝鮮半島に対する日本側の認識を象徴する記事でもあるので以下にみてみたい。

> オリムピックの陸上競技は、マラソンの優勝によつて、華々しき幕を閉ぢたのであるが、その日章旗の掲揚が、半島選手の健闘によつてなされたことは、意義深いと思ふ。それは二十余年の歴史の上に積み重ねられた成績には違ひないが、久しく期待され、幾度か逸せられたマラソン日本の榮冠が、半島の新人選手によつて「日本」の頭上に載せられたことは、何といつても、特筆されてよいことである(9)。

そしてさらに4年後に控えた東京五輪については「内地人と外地人と、心を協せ力を集めて、その偉大なる記念塔を築き上げなければならない」と述べられており、スポーツにおける内鮮融和が期待されていたのである。

これらの言説から日本側のメディアが報じた孫

基禎優勝の記事の特徴を確認すると、まず日本がオリンピック競技大会に初めて参加した第5回オリンピック競技大会（ストックホルム）以来、悲願のマラソン優勝であったという点が強調されていることが分かる。これは『東京日日新聞』の論調も同様であった[10]。次に孫基禎・南昇龍は朝鮮人であり、日本の一地方である朝鮮から代表として活躍し、日本に勝利を齎したことに意義があるという論調になっている。それが当時の植民地朝鮮のスローガンであった「内鮮融和」を象徴するような記事になっている点は重要である。このことを端的に示すのは9月17日の『東京日日新聞』に掲載された有高巖の以下のような言葉だろう。

> ベルリンのオリムピツク大會で孫君がマラソンに優勝したことは、廿余年來の國民の待望を成し遂げ耐久制覇の原因が軀幹の大小によらずして身神の鍛錬に基づくものなるを實地に例證した意義深い事象でありまた特に彼が半島出身であることは内鮮融和の一助ともなるべく種々の點から見てまことに慶賀に堪へない次第である[11]。

このように直截に孫基禎のマラソン優勝が内鮮融和に資するといったことが語られており、ここでの主張は先の2紙で確認してきたものと同様のものであった。

因みに『東京朝日新聞』には孫基禎の優勝に際して、この年朝鮮総督に赴任したばかりの南次郎の談話も掲載されている。南次郎は孫基禎と南昇龍の活躍を聞き、「誠にもつて快い話ぢや、儂には專門家のいふ記録のことは解らぬが世界一とは實際素晴らしい、殊に孫君の優勝に續いて南君も三等に入るなどスポーツの世界を離れて考へても非常に意味のある歴史的な大きな仕事だ、兩選手の奮闘は一死をもつて軍國に酬ゆる武人の氣魄と同じに評價さるべきもの」[12]と述べ、若き朝鮮人選手らの活躍に賛辞を送っていた。

ベルリンでのマラソン優勝の報道の他に1936（昭和11）年10月発行の『青年』という雑誌には「半島の生んだマラソン王　あゝ榮冠の蔭にこの涙」という題名で孫基禎を取り上げた記事が掲載されている[13]。挿絵入りで掲載されたこの記事は孫基禎と南昇龍を日本人の恩人との関係を中心に描いたもので、両者とも貧しい暮らしのなかで苦労し、峰岸や鈴木といった日本人からの援助を受けつつ、栄光を掴み得たという美談をやや道徳的な話として展開している。この記事が全国の青年団に配布されることを考慮すると、ここで展開される内容は日本で発行される新聞と同様に日本人の期待する孫基禎像・南昇龍像が描かれていると考えていいだろう。この記事のなかでは日本人教員への恩をマラソンでの優勝で報いる朝鮮人孫基禎が描かれており、それらが事実ではあってもその描かれ方は内鮮融和、また支配―被支配の正当性がシンボライズされていたものと捉えられる。

一方で朝鮮側のメディアは孫基禎と南昇龍の活躍をどのように報じたのか。『東亜日報』では8月9日に既に号外が発行されている[14]。その見出しには「世界の視聽總集中裡　堂堂、孫基禎君優勝　南君も三着堂堂入賞へ」とあり、孫基禎と南昇龍の順位とタイムが掲載されていた[15]。さらに8月10日の号外には9日の号外の記事に加えて朝鮮人数名の談話が掲載されている。そのなかで当時朝鮮体育会の会長だった尹致昊は「孫君の優勝は廿億の勝利」という見出しで「孫基禎君が優勝したということはすなわち朝鮮青年の未来が優勝したという予言として、或いは活教訓であると固く信じている。我々朝鮮の青年がスポーツを通してとりわけ二十億を相手にして堂堂たる優勝の栄冠を獲得したということはすなわち我々朝鮮の青年が全世界二十億人類に勝利したということである。我々の喜びと感激は衰えることがない」[16]と語っている。さらに8月11日の夕刊には「世界制覇の朝鮮マラソン　孫・南兩選手の偉業」という社説が掲載され、そこには「朝鮮の息子である孫南兩君は勿論世界に誇るに値する鐵脚も持っているうえに、世界制覇するさらに固い意志を持っているのである。兩君の優勝はすなわち朝鮮の優勝であり、兩君の制覇はすなわち朝鮮の制覇である」[17]と、尹致昊の談話と同様に民族主義的な論調で社説が記されており、孫基禎と南昇龍のメダルの獲得を朝鮮民族の優秀性へと結びつ

ける言説となっていた。そしてこの11日からは「朝鮮の息子　孫基禎」という特集記事が13日までの3日間に亘って掲載され、孫基禎がオリンピックで優勝するまでの軌跡も伝えている[18]。

当該期の朝鮮を代表するもうひとつの新聞、『朝鮮日報』ではどのように報じていたのか。『朝鮮日報』においては、まず8月11日の第1面に「朝鮮男兒の意氣　孫基禎の壯擧」という社説が掲載されている。その一部をみてみると、

> 我々は今回の孫、南両君の勝利をもって民族的一大榮譽を得ると同時に民族的一大自信を得たのである。即朝鮮のあらゆる環境は不利であっても我々の民族的に受けた天稟は他のどの民族より先行できないようなことはなく、努力さえすればどのようなことであっても成就しうるのである。我々はスポーツにおいて世界の班列に参席する資格を得たうえに我々は今後文化的道徳的其他あらゆる方面にあっても世界的水準に達する日にあることを信じるのである[19]。

と述べられており、朝鮮民族が世界のあらゆる民族に比べても勝るとも劣らない民族であることの証明として孫基禎と南昇龍の活躍を評価している。第2面には「朝鮮の勇名は世界に　偉大なる我々の新英雄　朝鮮青年の新しい歴史を打ち立てる民族觀喜三千里に充満」という見出しの下で孫基禎と南昇龍の活躍が大きく取り上げられていた[20]。

次に『朝鮮中央日報』の報道も確認しておこう。『朝鮮中央日報』でも8月11日の社説に「マラソン制覇　孫南兩君の偉功」という記事が掲載されており[21]、さらに同日の第4面では「オリンピック『マラソン』に勝利した孫南兩君の快報を聞いて」と題した記事で、孫・南の活躍が朝鮮民族にもたらす影響について言及しており、とりわけこうした勝利が東洋の事情を知らない外国の人々に朝鮮民族を知らしめる切っ掛けになったということを好意的に記述していた[22]。また13日の紙面では多くの写真とともに特集が組まれており、祝賀ムードの高まりが確認される[23]。

以上のようにベルリン五輪での孫基禎と南昇龍の活躍についての報じ方は日本と朝鮮との新聞メディアの間では異なるものとなっていたのであり、これはそれぞれにとってオリンピック競技大会のマラソンにおける優勝の捉え方の違いに起因していた。日本側の報道はオリンピック競技大会初参加以来の念願が日本の一地域の出身である朝鮮人青年によって成し遂げられたことに対して讃辞の報道を行っており、その報道の仕方は内鮮融和を示すものとなっていた。一方で朝鮮側の報道では孫基禎の優勝を讃えたうえで、この優勝が世界の標準に達した朝鮮民族の優秀性を主張することに最大の力点が置かれている。そしてスポーツ以外の分野も世界に伍する日が近いことを期待する主張となっていた。朝鮮側のこの主張は植民地支配を否定し、植民地支配からの解放を暗に示そうとしていたと考察される。そのため彼らの論理のなかでは孫基禎の優勝は「民族」の勝利でなければならなかった。

(2) 日章旗の抹消

孫基禎のベルリン五輪での優勝はこれまでみてきたように日本側と朝鮮側とではその認識に明らかな違いが確認された。とりわけ朝鮮側にみられた民族主義的な傾向は孫基禎のマラソン優勝を巡ってある事件を引き起こす誘因になっていたと考えていいだろう。それがいわゆる日章旗抹消事件と呼ばれる事件である[24]。まず事件の概要について以下で確認しておこう。

孫基禎がベルリン五輪で優勝した同月25日、東亜日報の夕刊に掲載された表彰台の孫基禎を写した写真には、胸にあるはずの日章旗のマークがなくなっていた。同日の朝刊には同じ写真が掲載されているが、その時は日章旗のマークがあり、これが意図的に消されたものであることは明らかだった。

この日章旗抹消を牽引した人物は当時東亜日報社のスポーツ記者であった李吉用という人物である。李吉用は東亜日報社が結社された1年後にはスポーツ記者として東亜日報社に入社し、一旦朝鮮日報社に勤めるも、再び東亜日報社へと復帰、スポーツ記者としてスポーツ記事を新聞・雑誌に綴り、ある時はスポーツ組織の委員や理事としてスポーツ大会の運営などにも携っていた[25]。さ

らに朝鮮における体育・スポーツの研究を推進するなど植民地朝鮮のスポーツ界において最も重要な人物のひとりであったと評価することができる。

李吉用が日章旗を抹消することを決意するまでの行動は鎌田の『日章旗とマラソン』に描かれており、その記載内容からも彼の上司を含めた多くの社員がその行為について支持していたことを窺わせる(26)。そして『東亜日報社史』には「李吉用體育部記者が調査部所屬本報專屬畫家李象範記者に日章旗處理を議論したのだが、その時二人はただにっこりと笑っただけで特に言葉を交わすことはなかった。以心傳心、差し出した者も受けた者も互いに意思が疎通していた」(27) と記されており、日章旗の抹消は着々と遂行されていったのであった。ただ日章旗の抹消はこのときが初めてではなく、ロス五輪のときに金恩培選手の胸の日章旗を消して掲載した経験から臨んだ行為であり、孫基禎の胸の日章旗抹消がこの後の大きな事件にまで発展することが想定できていたかどうかは疑義の残るところではある。しかしいずれにせよこの行為が孫基禎の優勝を「日本人」の優勝としたくはない朝鮮民族のナショナリズムが生んだ行為であったことは再確認される事実である。

それではこの日章旗抹消事件を受けて当局はどのように反応したのか、またこの事件に対してどのような認識を示していたのか。事件後に総督府の警務局長は以下のような発表をしている。

> 東亞日報は今回發行停止處分に附せられました。先日伯林に開會されました世界オリムピック大會のマラソン競技に我が朝鮮出身の孫基禎君が優勝の月桂冠を贏得た事は我が日本全體の名譽であつて、内鮮共に大に祝賀すべきものであり、且つ又内鮮融和の資となるべきものでありまして、苟且にも之が逆用せられて少しでも民族的對立の空氣を誘致するようなことがあつてはならないのです。然るに事實は新聞紙等の記事にして動もすれば對立的感情を刺戟する如き筆致に出づるものがあるのは、一般に遺憾とせられて居つた處であります(28)。

こうして朝鮮民族のナショナリズムを煽ったという咎により、東亜日報社は同月 29 日付をもって発行停止処分となった。植民地期における発行停止処分はこれが 4 度目(29) であったが、このときの発行停止処分は 9 カ月間に及び、経営の上での損害は甚大なものになったという。この警務局長発表における日本側の認識は先にみた日本の新聞報道とほぼ同様であるが、孫基禎の優勝は日本の勝利であり、この優勝は「内鮮融和」に資するように利用されるべきであり、民族的対立に利用されてはならないとされていた点は確認しておきたい事実である。孫基禎の優勝を朝鮮民族の勝利とし、民族主義的な報道を行うことは植民地社会の安定を望む当局にとっては当然危惧せざるを得ない事態であった。さらに日本の象徴である日章旗を抹消する「非国民」的行為に対しては法に照らして取り締まることで対応していったのである。また当局の動きに呼応して大東民友会(30) という朝鮮人で組織された親日団体は以下のような声明を発表している。

> 吾人は先づ孫君の優勝を朝鮮人のみの榮譽とする偏狹な態度を拒否しなければならぬ。孫君の出場が日章旗の下で行はれ、その競技が日章旗の翩飜と全日本國民の歡呼の中に於て獲られたところのものであると云ふことを忘れてはならぬ。今回の孫君の優勝を通して内鮮兩族の心臟と心臟とを貫く共通の歡喜と感激とが如何に兩民族の感情と情緒の融合を齎したことかを想はなければならぬ(31)

ここでもやはり孫基禎の優勝は日本と朝鮮の融和を示すものとして理解され、孫基禎の優勝を朝鮮民族のものとする民族主義的な論調や主張を退けている。

またこの声明では孫基禎の出身校である養正高等普通学校の陸上競技部でマラソン選手を指導した峰岸昌太郎(32) を讃えたうえで「へだてなき内地人の熱ある指導を論外に、孫君の優勝は全く考へられぬ所、而も今次の大會に日本のコーチの下に指導され、日本選手として出場して勝つたのである」(33) と、日本人指導者たちの功績を強調している。

このように日章旗抹消事件は総督府によって東亜日報などの発行停止処分というかたちで一応の解決をみた。しかしこの事件によって明らかになったのは世界一になった孫基禎を巡って植民地社会における支配－被支配の対立が顕在化し、「内鮮融和」というスローガンの下での懐柔的な政策が決して植民地朝鮮における社会の安定化を促さないということであった。この時期、文化政治から転換した宇垣一成による心田開発運動や国民精神作興運動など、後の南次郎による皇民化政策の土台が築かれていくなかで起こった事件であったことを鑑みると、宇垣の政策は浸透せず、植民地政策の限界を示した点にもその意義が見出される。故にその後の皇民化政策は「内鮮融和」から「内鮮一体」といったより強制的なスローガンの下で展開されていったのであり、スポーツという人々を熱狂させ、ナショナリズムを高揚させる文化に対する植民地権力側の警戒感はその後の支配政策にも反映されたとみることができよう。

2. 英雄としての孫基禎

ベルリン五輪での孫基禎のマラソン優勝は日本にとっても朝鮮民族にとっても喜ばしいものであり、それぞれに意味ある金メダルとなっていた。しかし、植民地朝鮮においてはその熱狂のなかで日本の論理を忌避したい民族主義的な動きが抵抗の行動へと転化していく。東亜日報社・朝鮮中央日報社による日章旗抹消事件はそうした民族的な抵抗を示した行動であった。この事件は朝鮮人の民族意識の強さを表出することはできたものの、当局から徹底的に弾圧され、その余波は英雄孫基禎にまで及んでいくことになる。それは植民地という支配体制のなかでの宿命でもあった。以下では日章旗抹消事件後の英雄孫基禎が植民地権力と朝鮮民族のナショナリズムの相克のなかで陥らざるを得なかった状況を彼の言動に着目しつつ検討してみる。

(1) 警戒される存在

朝鮮人らのスポーツに対する日本側の警戒は1930年前後の外務省の史料のなかでいくつか確認される[34]。これらは何れも朝鮮蹴球団に関するものであり、朝鮮蹴球団の海外遠征に際して、その動静を外務大臣宛てに報告したものであった。日本側の警戒は如何なるものだったのか、1935（昭和10）年の廣田外務大臣に宛てた天津の川越総領事の報告では以下のように記されている。

> 朝鮮蹴球團（約三十名）ハ昨年ノ例ニ倣ヒ本月廿一日平城(ママ)發廿四日頃當地着更ニ上海ヲ經テ東京ニ赴ク豫定ナル趣當地朝鮮人會ニ入報アリタル處其ノ時機偶々滿洲國陛下御渡日ト相前後シ居リ目下南京ニ於ケル朝鮮義烈團政治訓練第四期生ヲ募集中ニテ各地ニ同志ヲ派シ工作ヲ進メツツアリ等警戒スヘキ情報サヘアリ一般鮮人ノ行動特ニ注意ヲ要スル際右蹴球團ノ來津ニ依リ各地ヨリ多數ノ鮮人入込ムニ於テハ警衛ノ措置ニ頗ル困難ヲ來ス惧アル次第ニ付此ノ際右團体ノ渡支ハ成ルヘク見合セシムル様御取計アリ度シ
> 上海、滿ニ轉電セリ[35]

この報告の結果、桑島東亜局長より朝鮮総督府の警務局長宛てに朝鮮蹴球団の遠征延期の電信がなされ、実際に朝鮮蹴球団の遠征の延期が決定されている[36]。また朝鮮蹴球団が遠征に出掛ける際に民族主義者である呂運亨が選手らに対して激励の辞を送るとともに民族の団結を主張する演説をしていることからも民族主義者らの動きを把握していた当局のスポーツに対する警戒感は強くなっており、遠征延期の決定に影響を及ぼしたものと考えられる。

以上のことから日本側の朝鮮蹴球団への警戒は朝鮮蹴球団というスポーツ組織が中国を経由しながら遠征していく過程で、それに乗じて朝鮮人たちが特定の場に集まり、煩雑な状況のなかで何らかの政治的行動を起こすのではないかという懸念と警戒から生じたものであったことが分かる。

それではスポーツ選手としての孫基禎・南昇龍の場合はどうだったのか。日章旗抹消事件は孫基禎を警戒される存在へと変えた。当然のことながら孫基禎が朝鮮半島に戻ってくることによって噴出する朝鮮民族のナショナリズム、それを契機に

群がるであろう朝鮮の民衆に対する警戒感が強まったことはこれまで考察してきた点からみても否めない。そのことを端的に示す史料が内務省警保局の『特高外事月報』である。1936（昭和11）年8月分の『特高外事月報』の「朝鮮人の運動状況」には孫基禎と南昇龍のベルリン大会での活躍により、民族主義運動が高まってきていることに注意を促す報告がなされている。報告は民族主義運動が高まってきた状況の背景として、「帝都叛亂事件」[37]後に一部の朝鮮人に「國体に對する國民の確信に動揺を來しつゝあるが如き謬想」を抱かせるようになったとし[38]、その後は以下のように続く。

> 更に第十一回オリンピツク大會に於ける孫基禎、南昇龍選手の優勝は、一般朝鮮人に多大な衝撃を與へ、「全國民の二十四年來の宿望達成」として、内地人の歡喜に相和する者ある一面、一部偏狹分子に於ては、之を以て「朝鮮民族の優秀性を證名せられたり」と爲し、或は「両君の優勝は卽ち朝鮮の優勝であり両君の制覇は卽ち朝鮮の制覇である」として極力民族意識の誘發とその昂揚に努むる所あり、爲に一時沈衰せる民族主義運動も、最近擡頭の傾向頓に濃厚となれり[39]。

孫基禎と南昇龍の活躍をこれまで述べてきたように「朝鮮民族の優秀性の証明」とする主張、それが民族主義的な活動を誘発しているのである[40]。それに続いて『特高外事月報』は朝鮮内での民族運動に関わる状況、なかでも優勝報道の仕方や日章旗抹消事件などについて触れ、日本における朝鮮人留学生らの行動についても言及していた[41]。

次に彼らについての報告が出てくるのは同年10月の『特高外事月報』である。そこには他の陸上競技選手らとともに神戸港に帰港し、大阪での歓迎会に出席、翌日東京に向かうにあたり「當時両選手は、選手隊伍の最後尾に位し、一般鮮人の接近を容易ならしむるが如く、一部民族主義者の意に迎合せむとするやに認めらるゝ行動ありたり」[42]としている。孫基禎と南昇龍の行動に不信な点があれば、それがたとえ些細なことであっても監視の対象になっていたことが分かる。殊に孫基禎の場合は「在獨中孫基禎は、多數の外國人よりの「サイン」の求めに應じ「KORE（高麗）孫基禎」と記する等、不穏當の擧措」があった[43]とされており、オリンピックが行われたドイツにあっても孫基禎の行動は誰かに観察・監視されていたのである。そしてベルリンからの帰国に際しては孫基禎・南昇龍が戻ってくることによって朝鮮人らの祝賀会などの集会が行われたり、彼らに群がる群衆ができあがったりする状況を避けたかった当局は以下のように取締を行った。

> 孫南両選手は、帝國代表選手として出場し之が優勝に關しては、指導者竝國民の熱烈なる指導後援に依る所多く、從つて今回の優勝歸朝に際しても、全國民的に祝福歡迎すべきことに屬す。從つて既に上陸第一歩に於て、日本陸上競技聯盟の歡迎會あり、帝都に於ても、大日本體育協會、東京市等其他公の機關に於て盛なる歡迎會開催の計畫あるを以て朝鮮人獨自の歡迎會開催の要なしと認められ、一面前敍の如く内外に於ける民族主義運動は、両選手の歸朝を契機として相當高潮化するやの状勢にあり、斯る際朝鮮人のみを以てする別個の歡迎會慰安會等の開催を許すに於ては、民族的感情の趨く所、内鮮人對立の氣運を醸成するの虞なしとせざるものあるに鑑み、警視聽に於ては朝鮮人のみの歡迎會等は一切認めざる方針を採り、前記在京朝鮮人の歡迎計畫に對しては、諭旨中止せしめ、都下各大學朝鮮留学生の秋季陸上運動會に對しても、歡迎空氣の鎭靜後開催せしむべく延期方を諭旨する等、嚴重取締を加へ凡ゆる不穏策動を阻止せり[44]。

このように厳重な取締の下、孫基禎と南昇龍を朝鮮民族で祝うということはできなくなっていたのである。日本側が日本人と朝鮮人の対立の回避、高まる朝鮮人らの民族運動の雰囲気を鎮静化させることに注意を払っていた状況が窺える。

こうした状況はスポーツ界にも当然伝わっていたものと思われるが、大日本体育協会関係の史料や関係者らがこのことに直接触れている史料は管

見の限り見つかっていない。翻って考えるとスポーツ関係者らはこのことに敢えて触れないことにしていたのではないかと推察される。例えば10月3日に日比谷大音楽堂にて催された大日本体育協会主催の代表団歓迎報告会での平沼亮三の報告ではベルリンでのオリンピック競技大会で日本選手が活躍した種目と選手名を其々挙げているにもかかわらず、マラソンに関しては優勝に対する評価はしつつも孫基禎と南昇龍の名前を出していない(45)。これは差別的な言動ということではなく、恐らく上記の事件とその後の警戒によって両者の名前を意識的に伏せることになったのではないかと理解される。公の場においては迂闊に両者の名前を出せず、それを避ける状況にあった可能性は否定できない。また同報告ではマラソンの優勝について「やはりコーチが非常によく注意して、非常によく訓示を與へ、選手はこれに絶對服從致しまして、好く走つてあの好果を擧げたのだと私は飽くまで信じてゐるのであります。これはやはり日本の非常に誇るべき美點であるのではないかといふことを感じて參つたのでございます」(46)とも述べられている。ここでもやはり孫基禎・南昇龍の名前は出さず、彼らがコーチに絶対服従するという上意下達の行き届いた関係が日本の美徳であり、その結果がベルリンでのマラソン優勝であったとする発言となっていたことが分かる。これをスポーツにおける日本精神の発揮の一例として紹介している(47)ことからも両選手の活躍をできる限り日本側の期待する方向に沿うものとして伝えていこうとしていた。

このように孫基禎と南昇龍はベルリンでのオリンピック競技大会において輝かしい成績を残した英雄であると同時に招かれざる者として存在していた。それは植民地朝鮮からの日本代表選手という立場に対して日本という国家と朝鮮民族のそれぞれの思惑が余りにも強く反映された結果でもあった。

(2) 英雄孫基禎の葛藤

ベルリン五輪での優勝により日本、そして植民地朝鮮で英雄となった孫基禎は社会的影響力を持つ存在になった。彼は日本と朝鮮民族を表象する存在としてその後を生きねばならず、それは植民地権力とナショナリズムの相克と葛藤のなかに身を置くことを意味していた。

ベルリンでの大会後には日章旗抹消事件も相俟って日本から警戒される存在だった孫基禎だが、その後の行動には植民地権力との繋がりが切り離せないものになっていたことが見受けられる。日本がアジア・太平洋戦争へと突入し、戦線の拡大とその後の戦況の悪化により人的資源確保の動きが活発となってきた1943（昭和18）年11月、朝鮮半島北部の咸鏡北道を訪れた孫基禎は朝鮮人学生に学徒兵への志願を呼び掛ける存在となっていた(48)。オリンピック競技大会で英雄となった孫基禎はその知名度ゆえに対日協力に加担せざるをえない存在となっていた(49)。

日本での学徒出陣の後、植民地朝鮮・台湾では「陸軍特別志願兵臨時採用規則」(50)が公布され、植民地からも学徒兵が駆り出されることになった。孫基禎は明治大学の卒業生として学徒先輩中堅団という組織の一員となり、朝鮮人学徒の募集を呼び掛けていくことになったのであった。この時期の『京城日報』には連日のように朝鮮人志願兵に関する記事が掲載されている(51)。

ベルリンでのオリンピック競技大会時には日本の植民地政策に賛意を示していたとは思われない孫基禎がこの時期に植民地権力の意に沿う行動を取らざるをえなくなった背景はどのようなものだったのか。ベルリン五輪後の孫基禎に着目しながら考察してみたい。

オリンピック競技大会後に朝鮮に戻った孫基禎は養正高等普通学校での卒業を迎える年でもあったため、1936（昭和11）年12月には日本の大学への進学を希望し、東京高等師範学校を受験する(52)。しかし1月の発表で不合格となり、結果、朝鮮の普成専門学校に進学することになった。普成専門学校での学生生活は長くはなかった。普成専門学校自体が当局からの監視の対象とされていた学校でもあったことから、権泰夏と鄭商熙の後押しを受けて半年後に再び日本の明治大学へ入学し直したという(53)。その後は1940（昭和15）年3月に明治大学を卒業し、朝鮮に戻るまでの間、日本で学生生活を送ることになったのである。

さらに孫基禎は日本代表選手としてその栄誉が称えられることにもなる。1937（昭和12）年1月にオリンピックなどで活躍した日本人選手らとともに朝日体育賞を受賞したのである。そのときの授賞式では「この賞を持つて國に歸り先生達に早く見せ度いと思ひます、四年の後には東京で必ずもう一度やつてみます」[54]と発言し、1940（昭和15）年に開催予定の第12回オリンピック競技大会（東京）で出走する意欲も見せていた。

しかし孫基禎はその後マラソンを走ることはなく、日本と朝鮮の繋がりを示す英雄として表象されるようになる。その典型が1938（昭和13）年11月に開催された国民精神作興体育大会で行われた矛継走である。これは伊勢神宮から聖矛を各府県のランナーたちが繋ぎながら継走するもので、結城神社、熱田神宮、三島神社、鶴ヶ岡八幡宮などを経由し、最終的には明治神宮に至るというコースで行われている。この矛継走は大会を彩るイベントとして行われるとともに、神都と帝都を結ぶことを象徴する大行事でもあった。この継走の最終ランナーは金栗四三であり、その金栗に矛を繋ぐランナーとして登場するのがベルリン五輪のマラソン優勝者である孫基禎であった。『東京朝日新聞』はその時の様子を以下ように報じている。

> 第二十一區を擔當した青山小學校の豆選士小川芳至君（一四）以下四十名は伊勢神宮から護衛バスに積み込んだ炬火六十本に火をつけて赤坂區役所前から外苑入口へ勇ましくひたはしり、こゝに待ち構へたオリンピツクの覇者孫基禎君に渡せば孫君は村社講平君以下の衛團に守られて神宮競技場の國民精神作興大會會場へと力走
>
> 會場は既に濃き夕闇に閉され、篝火があかあかと燃える時しも六十余の炬火が「聖矛」を守つて會場に繰り込む、一萬觀衆は『萬歳』の歡呼を轟かす、ここで最終選士金栗四三君への受繼ぎが行はれ君が代齊唱裡に完了[55]、

その後、聖矛を受け継いだ全日本陸上競技連盟会長の平沼亮三から明治神宮の宮司に矛が手渡され、神殿に奉納されたとしている。このような多くの観衆の前に孫基禎が現れるのは実はこの時だけではなかった。1940（昭和15）年に皇紀2600年奉祝の大会としても開催された第11回の明治神宮国民体育大会にも聖火団のひとりとして参列していたのである。このことを示す史料は孫基禎自身が記し、『三千里』に掲載された「體育大祭典參觀斗朝鮮體育振興에의展望」のなかにある。この第5節は「聖火團에參列」という見出しになっており、その様子は以下のように記述されている。

> 紀元二千六百年奉祝第十一回明治神宮國民體育大會の閉會式は惶悚にも三笠宮殿下の臺臨を仰奉して十一月三日午後四時五十八分から明治神宮外苑競技場で擧行されたが、輝かしい入賞者三千餘名を先頭に大會役員と各府縣選手一萬五千餘名が堂堂入場、そして爆發する感激の歡聲と拍手は蜿蜒と入場する各部隊の入場ごとに起こった。そして脱帽總起立下に嚴肅にも聖恩之旗が入場し壇上に奉迎された後最敬禮、そして「君が代」齊唱、宮城、明治神宮、橿原神宮遙拜、その後に明治神宮から捧持してきた聖火の一團が到着したが、先頭には往年のマラソンの覇者金栗四三選手、副捧持者は今回大會のマラソン優勝者竹中正一郎選(ママ)〇、これを再び護衛してマラソン王日比野寛翁と小生とマラソン長距離競走の先輩たちであった[56]。

このように孫基禎はマラソン金メダリストとして日本という国家を象徴する重要なスポーツの式典に参加しており、日本の英雄のひとりとしてその栄誉とともに表象化される存在となっていたのである。これは当該期の植民地政策のスローガンが「内鮮一体」であったことを鑑みると、朝鮮民族の孫基禎が日本の英雄のひとりであることは即ち日本と朝鮮半島を結びつける英雄でもあり、これら一連の式典への参加は「内鮮一体」を表象することになったものとも考察される。このことは孫基禎の意図がどのようなものであったのかに関わらず、英雄孫基禎が対日協力の網の目に組み込まれていったことの証左でもあろう。

またベルリンでのオリンピック競技大会後の孫基禎をみていくときにもうひとつ重要なのは彼が日本人、あるいは日本から恩恵を受けている朝鮮

人との繋がりが緊密になっていたという点である。例えば学徒先輩中堅団でともに咸鏡北道を訪れた大山寅相こと趙寅相は養正高等普通学校陸上競技部の先輩にあたり、彼は総督府の御用新聞であった『京城日報』の政治記者でもあった。朝鮮総督府学務局に勤める鄭商熙も養正高等普通学校陸上競技部の先輩にあたり、ロサンゼルスでのオリンピック競技大会で代表選手として活躍した権泰夏は明治大学の先輩であり、満鉄に勤務していた。そして孫基禎自身も朝鮮貯蓄銀行での職を朝鮮陸上連盟の会長であり、貯蓄銀行の頭取であった伊森明治に紹介してもらったこともあり(57)、孫基禎を取り巻く人々の多くに日本人あるいは日本の組織に所属する者が多数いた事実が確認される。孫基禎は自身の対日協力行為について「私はマラソンで名をあげたということで学徒兵募集に強制動員された。これに応じなければそれこそどんなひどい目にあうかもわからなかった」(58) と語っている。確かにその可能性は否定できない。ただ上記で確認してきたように英雄孫基禎にはこうした人脈による柵も存在していたと考えられる。

このように英雄孫基禎は帝国日本の重要なスポーツイベントを彩る人物のひとりに数えられるようになっており、且つ当時の彼の生活圏において付き合う人々の多くは日本と強い関係を持つ人々であったことが確認される。彼の対日協力という行為もこうした一連の流れのなかで把握されるべきであり、こうした柵のなかで帝国日本の英雄として表象されていったことが彼の対日協力という行為に繋がっていったと考えられる。このことは日本の英雄でもあり、朝鮮民族の英雄でもあったひとりのスポーツ選手が、この時代を、また植民地朝鮮をどのように生きねばならなかったのかということの難しさを痛感させられる事実でもある。

3. まとめと考察

本研究はベルリン五輪で金メダルを獲得した英雄孫基禎に焦点を当て、植民地権力と朝鮮民族のナショナリズムがそれぞれの表象としての英雄孫基禎を巡る軋轢のなかで孫基禎の行動を規定する非対称的な二つの力が最終的に彼の行動にどのような影響を与えたのかを明らかにするものであった。

1936（昭和 11）年 8 月、ベルリン五輪における孫基禎と南昇龍の活躍は日本、植民地朝鮮それぞれにおいて熱狂を齎した。しかしその活躍の報道についてはそれぞれの認識に齟齬があり、日本は 24 年目にして念願のマラソン金メダルを朝鮮人選手が齎したという主唱のなかで「内鮮融和」が謳われる一方、植民地朝鮮では民族主義者らによって「民族の優秀性」が主唱されていた。この相反する二つの状況はその後に起こったいわゆる日章旗抹消事件に最も典型的に現れる。このとき孫基禎の胸に日の丸のない記事を掲載した東亜日報社・朝鮮中央日報社は無期停刊処分を受ける。これは当局が孫基禎の優勝は内鮮融和に資するものでなければならないという認識に裏付けられるように植民地社会の安定を脅かす民族的な対立が助長される事態に対して危惧を抱いていたからであった。

事件後の影響は孫基禎と南昇龍にまで及び、彼らは警戒される存在としてベルリンから帰朝することになった。当局の警戒は朝鮮民族のナショナリズムの芽を摘む状況となっていたが、孫基禎のベルリン五輪の優勝による朝鮮民族のナショナリズムの高まりは、それと並行して警戒する植民地権力側の権力の行使をより強める結果を齎したと捉えることができよう。そしてベルリンから戻った孫基禎はこの折り重なる植民地権力とナショナリズムのなかに生きねばならず、オリンピックを通して英雄となった孫基禎の「身体」は非対称的な力のコンフリクトなかで強まった権力の網の目から抜け出せなくなり、「内鮮一体」の表象と化すことになっていったのである。植民地期においてマラソンを志向し、オリンピック代表という国家に包含されるシステムを経てきた彼自身の生活圏は切り離すことのできない植民地権力の柵とともに推移していたのであり、彼が若き朝鮮人青年らに学徒兵への志願を呼びかけることになったのも帝国日本の「英雄」であったからだと言わざるをえないだろう。

付記：本研究は科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金（若手研究 B）課題番号 24700654 研究課題名「植民地朝鮮における対日協力とスポーツに関する研究」（平成 24 年度～平成 27 年度）の研究成果の一部である。

(1) もうひとりはウェイトリフティングの金晟集であり、彼は 1948（昭和 23）年のロンドン五輪、また続く 1952（昭和 27）年のヘルシンキ五輪において 2 大会連続銅メダルを獲得した人物である。
(2) 孫基禎の生い立ち、ベルリン大会での活躍とそれまでの経緯、さらに日章旗抹消事件などについて詳述された著書に鎌田忠良の『日章旗とマラソン』潮出版社、1984 がある。史資料が充実していることに加え、インタビュー調査なども数多くなされて編まれた著書である。またその他にも沢田和明「時代を走らされた長距離ランナーたち――朝鮮半島支配と人権――」、平井肇編、『スポーツで読むアジア』所収、世界思想社、2000 などもあり、日章旗抹消事件については浅野健一の「日帝支配下の韓国の言論――「東亜日報」日章旗抹消事件を中心に――」、『評論・社会科学』55 号、1996　山本典人、『日の丸抹消事件を授業する』岩波ブックレット NO. 334、1994 といった研究もある。
(3) 例えば하정희、『스포츠영웅 손기정의 체육활동에 관한 역사적 재조명』중앙대학교대학원박사논문、2012. などがその典型的な研究であり、その他にも곽형기・이현정、「마라토너 손기정의 체육사적 의미」『한국체육과학회지』Vol. 18 No. 3、2009. 손환、「손기정의 생애와 스포츠활동에 관한 연구」『한국체육과학회지』Vol. 13 No. 2、2004. 정찬모、「孫基禎選手의 베를린 올림픽 마라톤 制覇가 우리민족에게 주는 歷史的意義」『체육사학회지』Vol. 2 No. 1、1997. などがあり、何れの論文も孫基禎の民族主義的価値に基づいて論述されている研究である。
(4) 坂上康博、『権力装置としてのスポーツ』講談社選書メチエ、1998 および高嶋航、『帝国日本とスポーツ』塙書房、2012。
(5)『読売新聞』1936 年 8 月 10 日付。
(6)『読売新聞』1936 年 8 月 10 日付　号外。
(7)『東京朝日新聞』1936 年 8 月 10 日付。
(8)『東京朝日新聞』1936 年 8 月 10 日付。
(9)『東京朝日新聞』1936 年 8 月 11 日付。
(10) 8 月 19 日付の『東京日日新聞』には「競技の最終を飾るマラソンに孫が日本廿四年來の宿望を達成してくれたことは全く痛快なことだつた、日本廿五年前先輩金栗さんが第四回のストツクホルムの大會に出場して歸朝以來マラソンには日本の世界制覇が可能であると自信を得て以來アムステルダム、ロサンゼルスに選手を送つたが、その都度失敗に歸したが、つひに今回はその怨みを晴らす機會を得た」という記事が掲載されていた。
(11)『東京日日新聞』1936 年 9 月 17 日付。
(12)『東京朝日新聞』1936 年 8 月 11 日付。
(13) 鷺宮文彦、「半島の生んだマラソン王　あゝ榮冠の蔭にこの涙」、『青年』第 21 巻 10 号、日本青年館、pp. 34-39、1936。
(14) 東亜日報社は現地に権泰夏と鄭商熙の 2 名を特派員として送っていたことから他社に比べて情報をいち早く本社に伝えることができたものと思われる。
(15)『東亜日報』1936 年 8 月 9 日付　号外。
(16)『東亜日報』1936 年 8 月 10 日付　号外。
(17)『東亜日報』1936 年 8 月 11 日付。
(18)『東亜日報』1936 年 8 月 11 日付、同 12 日付、同 13 日付。
(19)『朝鮮日報』1936 年 8 月 11 日付。
(20)『朝鮮日報』1936 年 8 月 11 日付。
(21)『朝鮮中央日報』1936 年 8 月 11 日付。
(22)『朝鮮中央日報』1936 年 8 月 11 日付。
(23)『朝鮮中央日報』1936 年 8 月 13 日付。
(24) 日章旗を抹消するという行為は本論においては主に東亜日報社の件について論じているが、朝鮮中央日報社においても同様に孫基禎の胸の日章旗を消すという行為があった。朝鮮中央日報社も東亜日報社とともに停刊処分に付され、その後経営に行き詰まったため、復刊には至らず、そのまま廃刊となっている（韓国史事典編纂会編、『朝鮮韓国近代史事典』日本評論社、2002、p. 233）。
(25) 한국체육기자연맹편、『일장기말소의거기사　李吉用』인물연구사、1993. pp. 292-293。
(26) 鎌田忠良、前掲書、pp. 355-356。
(27) 東亜日報社編、『東亜日報社史』東亜日報社、1975、pp. 364-365。
(28) 森田芳夫、「孫選手のマラソン優勝と日章旗マーク抹消事件」、『緑旗パンフレツト第五輯』緑旗連盟、pp. 12-13、1936。
(29) 東亜日報社の停刊処分の 1 度目は創刊した年の 1920（大正 9）年 9 月であり、このときは社説で祭祀問題について触れ、日本の三種の神器を批判したことから停刊処分となった。2 度目は 1926（昭和元）年の 3 月であり、ソ連の国際農民会本部から朝鮮農民に送った三・一独立運動の七周年記念の祝電を掲載したことにより停刊処分を受けている。3 度目は 1930（昭和 5）年の 4 月で、創刊十周年記念事業において国内外の有名人士の祝辞を掲載していたところ、アメリカの『ネーション』誌の主筆の祝辞を掲載したことに不穏な動きがあるとして停刊処分を受けている（東亜日報社、前掲書、p. 150、pp. 256-258、pp. 301-302）。
(30) 大東民友会は「1936 年 9 月に結成され、朝鮮における全国的な転向団体としては最初のもの」であり、この会の転向は植民地権力からの強制や朝鮮民族へ

の裏切りではなく、朝鮮民衆の「救済」「幸福」「発展」を重視し、自発的に朝鮮民族の救済をなすことが目的であったとされるがその内実は親日派に傾倒している団体であったと言えよう（松田利彦、「植民地末期朝鮮におけるある転向者の運動――姜永錫と日本国体学・東亜連盟運動――」、『人文學報』、pp.131-161、1997 参照）。

(31) 森田芳夫、前掲書、p. 13。

(32) 峰岸昌太郎のことについては西尾達雄の「養正高等普通学校体育教師峰岸昌太郎について」北海道大学大学院教育学研究院紀要第 104 号、2008 と「朝鮮体育協会と峰岸昌太郎」北海道大学大学院教育学研究院紀要第 110 号、2010 の二つの論文のなかで詳しく述べられている。

(33) 森田芳夫、前掲書、p. 21。

(34) 例えば JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012462400、体育並運動競技関係雑件 第一巻 14. 朝鮮蹴球団ノ一行来渡出発関係、1929.1.30、あるいは JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012473800、体育並運動競技関係雑件 第三巻 44. 朝鮮蹴球団、1934.4.26 など。

(35) JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B04012469200、体育並運動競技関係雑件 第四巻 9. 朝鮮蹴球団関係、1935.3.8、p. 89。

(36) 同上、p. 92。

(37) 1936（昭和 11）年 2 月 26 日に起こった二・二六事件を指している。

(38) 内務省警保局、『特高外事月報』昭和 11 年 8 月、p. 99、1936。

(39) 同上。

(40) 朝鮮人民族主義者らが民族の身体の近代化を志向し、スポーツをそのひとつの手段と捉えていた点に関しては拙著「植民地朝鮮における近代性と民族の「身体」――スポーツによる民族的劣等感の払拭――」、『植民地教育史研究年報』第 17 号、日本植民地教育史研究会、2015. を参照にされたい。

(41) 内務省警保局、前掲書、p. 100。

(42) 内務省警保局、『特高外事月報』昭和 11 年 10 月、p. 96、1936。

(43) 同上。

(44) 内務省警保局、前掲書、p. 97。

(45) 平沼亮三、「オリムピツクより歸りて」、『オリムピツク』第 14 巻第 11 号、大日本体育協会、pp. 6-7、1936。

(46) 平沼亮三、前掲書、pp. 8-9。

(47) 平沼の報告は『第十一回オリムピツク大會報告書』にも全く同様のものが掲載されている。ただ『第十一回オリムピツク大會報告書』ではいくつかの節に分けられて記載されており、その各節には見出しがつけられている。ここでの見出しは「日本精神の發揮」とされていた。

(48) 1943 年 11 月 14 日付の『京城日報』には「〝學徒の奮起確信、激勵陣頭に孫基禎氏」という見出しの記事が掲載されており、孫基禎は「われら若き半島青年が今こそ起つて大東亞戰爭に直接身をもつて戰はなければ、何時またこんな絶好の○○があるでせうか、大いに血を流し、○をもつて若き日の○○を○は○○なりとせん、いふ、半島はあげて學徒の出陣を○○してあるのです、全く○○です。未だ○つてこんなに二千五百萬が○蹶起してその熱と○を一つの點に集中させたことがあつたでせうか、私はこのやうな氣持を學徒○その○○を訪れて○へ○○を乞ふと共に、微力ながら大いに激勵するつもりです。」と語っていた（○は文字の判読ができなかった部分である）。

(49) このことはすでに姜徳相の著書『朝鮮人学徒出陣』において触れられていた。(姜徳相、『朝鮮人学徒出陣』岩波書店、1997、p. 134)。

(50) 1943 (昭和 18) 年 10 月 20 日に陸軍大臣東條英幾の名の下に通告されている。この『昭和十八年度陸軍特別志願兵臨時採用規則』の第二条には「前条ノ規定ニ依リ陸軍ノ兵役ニ服スルコトヲ志願スル者ハ昭和十八年十一月二十日迄ニ到着」するよう願書等の提出を促しており、孫基禎が学徒先輩中堅団として咸鏡北道を訪れた時には締切りが間近に迫っていた。

(51) 例えばこの時期の『京城日報』には「學徒出陣の名乘り　全鮮をどよもす感激」(11 月 9 日付)、「學徒よ戰果に續け　長屋軍報道部長語る」(11 月 10 日付)、「大戰果に學徒の闘魂爆發」(11 月 11 日付)、「歸鮮待つや遲し　又も九名揃つて志願」(11 月 12 日付)、「學窓より戰場へ　今月の誓ひは志願兵の激勵」(11 月 12 日付)、「卒業生にも榮光燦　征け突撃路は開けたり」(11 月 13 日付)、「總志願へ門を叩く　學徒宅へ出向く熱意の先輩達」(11 月 13 日付) という見出しの記事が掲載されていた。

(52) この時期、孫基禎が東京での生活への憧れを抱いていたことは『新青年』という雑誌記事のなかで将来の希望に「東京の生活はしてみたいと思ひます」と述べていることからも確認される（孫基禎、「花形密語集」、『新青年』第 18 巻第 1 号、博文館、p. 226、1937)。

(53) 孫基禎の自叙伝によると、普成専門学校での学生生活は要注意人物として常に監視される状況だったため、日本の大学に進学することを希望したと記されている（孫基禎、『ああ月桂冠に涙』講談社、1985、pp. 213-215)。

(54) 『東京朝日新聞』1937 年 1 月 26 日付。

(55) 『東京朝日新聞』1938 年 11 月 7 日付。

(56) 孫基禎、「體育大祭典參觀과朝鮮體育振興에의展望」、『三千里』第 13 巻　第 1 号、三千里社、p. 375、1941。

(57) 孫基禎、『ああ月桂冠に涙』講談社、1985、p. 226。

(58) 孫基禎、前掲書、p. 231。